

成寿特別号

昭和五十九年 冬

ゼロからの
出發

横浜 善光寺刊

奉告諷經香語

時節因緣到

じせついんねんいた
時節因緣到る

四旬歲月中

しじゆんさいげつ
四旬歲月の中

加恩衣德界

おんえ とつかい
恩衣の徳界に加わる

歡喜有何窮

かんぎ なん きわ
歡喜、何ぞ窮まり有らん

嘆

一超直入菩提道

いちじゆちうじゆにちゆう
一超直入す菩提の道

開發心華淨信豐

しんげ かいはつ じやうしんゆた
心華を開發して淨信豐かならん

拜啓 師老の候と相事り有りとお怪しい
ことと存じます

さて今般当寺方丈が緋恩衣被着的の
崇奉に浴されましたので成春誌は
それも物集りとて編集しなすまうた
是れお済みなすまうたあぬかい
存じます

次に目下タイ國ワット・パウナム・アサナ僧の
募集をおこなつておます。此處の方
又はお同い合のめ方は事務局までご連絡
ください。なおアメリカの諸君は
募集しなすまうたは念みの程を
合意

十二月吉日

善光寺事務局

檀信徒各位殿



許状

曹洞宗

善光寺住職

正教師黒田武志

可緋恩衣

昭和五十九年九月五日

管長秦慧玉

挨拶

このたび緋ひの恩衣おんえを着用することのできる榮譽に浴しました。まことに有難く、身に余る光榮であります。まづもって御開山棟庵白純大和尚の御真前、開基成寿院殿満徳賢道禪大居士、福壽院殿賢徳妙愛禪清大姉の御靈前に御報告申し上げます。

大本山総持寺を開かれました瑩山けいざん禪師は、「瑩山今生の仏法修行は、この檀越だんごつの信心によつて成就す」と述べておられます。私はこのお言葉にいま深い感銘を受けております。と申しますのは、私が緋恩衣の特許を得たのは、お檀家の皆様方のご信心のおかげと肝に銘じているわけでありませう。心から厚く御礼申し上げますとともに、これを契機として更に一段の精進を誓うものであります。

おかげさまで、昨年九月、さいわいにも長男武徳たけのりの得度式を挙げることができましたので、今後は、善光寺の後継者として皆様の御期待にこたえ得るよう育成してゆく所存でございます。さらにまた、徒弟桐元大智が去る九月、両大本山に拝登して瑞世の式を挙げ、和尚の位に進むことができたので、いよいよ陣容がととのつてまいりました。何卒、今後ともよろしく御支援御鞭撻のほどお願い申し上げます。

昭和五十九年十一月吉日

黒田大圓(武志)



開 山 模庵白純大和尚(栃木県大田原市光真寺36世中興)



開 基 成寿院殿満徳賢道禅大居士(K.K.ナリス化粧品先代社長 村岡満義)
福寿院殿賢徳妙愛禅清大姉(K.K.ナリス化粧品先代社長夫人 村岡愛)

恩衣とは

このたび、当山の方丈様が緋の恩衣を着用する資格を得られましたことは、まことにめでたいことであります。

宗門では、重要な法要の導師をとめるにはそれ相應の資格がなくてはなりません。

「恩衣」は、「資格衣」または「道具衣」とも申しまして、導師となる資格を具備した人だけが着用できるものでありまして、緋衣・黄衣・赤紫衣があり、緋衣は四十五歳以上で、すぐれた経歴のある人にだけその資格が付与されるものであります。四十代でこれを得るのは中々むずかしく、五十歳を過ぎてその特許を与えられるのが一般であります。

方丈様は素晴らしい経歴を持っておられますので、四十六歳にしてその榮譽に浴したのであります。

方丈様の経歴は、お檀家の皆様方にも知っていただくべきことですので、経歴書と、佐藤俊明老師の筆に成る「ゼロからの出発——開創十五周年の軌跡——」を次に転載します。

「ゼロからの出発」は、『曹洞宗実践叢書』第五巻に収録されているものの転載であります。

また、方丈様が、去る七月二十一日、横浜市立工業高等学校で講演された「大なる哉こころ」の抜粋を載せました。方丈様のケタはずれの行跡をお読み取りください。

黒田大圓(武志)経歴

履 歴

昭和・年	月	日	事 項
十三	一	一	栃木県に生まれる
二十八	五	一	栃木県光真寺にて得度・三十四年同寺にて立身
三十四	九	一	右寺住職黒田白純の室に入り伝法
三十七	十一	十一	正教師に任ぜらる
四十一	十	十二	永盛寺住職に任ぜらる
四十一	冬前		右寺に於いて結制
四十四	十一	二十八	長光寺住職に任ぜらる
四十四	十二	二	福井県常在院住職加藤照雄二女倫子と結婚
四十五	六	十	善光寺住職に任ぜらる(寺号変更)
四十七	十	十	善光寺に於いて普山結制
五十九	九	五	緋恩衣特許せらる

修学及び役職歴

昭和・年	月	日	事 項
三十七	三	十五	駒沢大学大学院修士課程修了
自二十七 至三十七	三	十六	大本山総持寺本山僧堂並びに特別僧堂安居
自三十七 至三十八	九	三十	日本一周托鉢行脚
自三十八 至三十九	十二	十四	タイ国ワットパフナム安居
自三十九 至四十一	十一	三十一	曹洞宗管長秘書に任せらる
自四十一 至四十二	十	十	准師家に任せらる
自四十二 至四十四	九	二十	北米曹洞宗開教師に任じられ、ロスマンゼルス禅センター駐在開教師を命ぜらる
四十五	九	十七	参禅道場の認可を受ける
四十七	十二	十七	参禅道場師家に任せらる
四十九	三	二十六	大本山総持寺参与に任せらる
五十	十二	一	瑩山禅師六百五十回大遠忌法要係に任せらる
自五十二 至五十六	二	十	東南アジア法縁寺院歴訪宗教事情視察を命ぜらる
五十二	五	二十	大本山総持寺地方副監院に任せらる
五十三	十	二十七	大本山総持寺国際部次長に任せらる
			ハワイ開教七十五年慶讃法要記念式典視察団事務局長を命ぜらる

新寺建立並びに伽藍整備

昭和・年	月	日	事項
四十四	五	三十	仮本堂建設
四十四	六	二十九	宗教法人長光寺設立
四十五	十一	十六	善光寺庫裡建設(寺号変更)
四十七	五	十	本堂落慶
四十七	六	十	境内地取得
五十四	一	三十一	釈迦殿建設用地取得
五十七	十	四	釈迦殿建立落慶
五十八	五	一	不動殿増改築
五十八	五	二十八	開創十五周年記念式典挙行
五十八	十	一	跋陀婆羅菩薩・韋駄尊天・烏枢沙摩明王勸請
五十九	二	一	別院建立敷地取得
五十九	五	二十八	大般若経勸請解縑
五十九	八	十	釈迦殿本尊脇仏(文殊・普賢)制作発注

国際活動

昭和・年	月	日	事	項
四十	十	一	第六回世界仏教徒会議（タイ国）に日本代表として出席	
四十一	八	十	タイ国より仏舍利を奉戴し高階管長ほかに奉呈する	
自四十七 至五十七	四	十一	全日本仏教会国際専門委員を委嘱せらる	
五十一	十	一	第十一回世界仏教徒会議日本大会準備委員を委嘱せらる	
五十二	三	十二	第十二回世界仏教徒会議日本大会実行委員会委員を委嘱せらる	
五十二	七		ヨーロッパ六ヶ国宗教視察	
五十三	十	十六	世界仏教徒連盟会長ブーン妃殿下より感謝状を受く	
五十三	六	一	国際仏教興隆協会評議員を委嘱せらる	
五十三	五	二十三	日華仏教文化交流協合理事を委嘱せらる	
五十九	一	十五	善光寺海外留学僧派遣育英会を設立	
五十九	十一	二十四	ロンポー生誕百年祭奉讃参拝団長	

教化活動

・駒沢大学茶道部一服会（O・B）会長、日本ボーイスカウト横浜八十四団顧問、小林寺拳法栄光道院顧問等、地域の文化・教化活動にも力を入れている。



十八羅漢圖
丁巳年
二月
畫

丁巳年
二月
畫

ゼロからの出発

——新寺建立十五年の軌跡——

佐 藤 俊 明
き とう しゅんめい

はじめに

経 過

横浜市港南区の日野公園墓地（十一万坪）の正門近くに新寺「善光寺」がある。

檀信徒ゼロから出発して、開創わずか十五周年にして檀信徒二千を擁している。この驚異的發展の軌跡は何か。新興宗教に押しまわられている既成教団としてそれは一瞥に価するものである。

一、昭和三六年、林堅峰師（三重県福源寺住職・当時大本山総持寺知客^{しか}）、この地に小庵を結び「長光寺」と称したが、寺号公称に至らないまま、四三年、不遇のうちに遷化した。

二、翌四四年二月、アメリカから帰ったばかりの黒田武志師（三二歳）、この地の将来性を見抜き、すでに人手に渡っていたこの小庵に六百万円を投じて譲り

受け、同年十一月二八日宗教法人「善光寺」として新寺建立につき県知事の認証を得、大阪の成寿堂本舖ナリス化粧品（現在の株式会社ナリス化粧品）社長村岡満義氏を開基に請した。ついで十二月二日、伊藤喜三郎氏（現総代・伊藤喜三郎建築研究所長）夫妻並びに前記村岡満義氏夫妻を媒酌人として倫子夫人との結婚式を挙げた。

三、翌四五年一月八日、地鎮祭を挙行し、本殿及び客殿三五坪を建立した。（坪当り工事費一〇万円）併せて、土地一六四坪（坪単位一〇万円）を購入し、開基家村岡氏及びナリス化粧品社員一同より一千万円の浄財喜捨を受け、四五、四六の兩年をもつて支払いを完了した。

四、四七年七月、本堂及び客殿七五坪の増築に着手（工事費千八百万円）、十一月二八日、晋山式及び落慶式を挙行した。こうして当時檀徒数四六〇世帯に達したので、五ヶ年計画を樹立し、檀徒数一千世帯確保を目標にして諸行事を展開しはじめた。

五、五五年、目標をはるかに突破して檀徒数一、六〇〇世帯を数えるに至り、かねて発願の釈迦殿建立の構想を発表し、伊藤喜三郎建築事務所設計を、水沢工務店に施工を依頼し、五六年五月三十日着工、翌五七年十月四日落慶式を挙行した。総工費、土地取得費を含めて三億七千万円。引き続き旧館の増築に五千万円を投じ、五八年五月、工事を完了した。

六、五八年五月二八日、開創十五周年記念式典を挙行した。

黒田師の経歴

黒田武志師は、栃木県大田原市の光真寺（子育て地藏尊講員一人をもつ由緒ある寺）住職黒田白純師（五四二年二月四日遷化）の六男として生まれ、駒沢の大学院で修士課程修了（三七年）、引き続き総持寺に上山安居し、九月送行（下山）して、十月永平寺に安居したが四大不調のため一ヶ月で送行し、全国を托鉢行脚し

た。そして翌三八年、新たに開設された特別僧堂第一期生として総持寺に上山安居した。ここで、翌三八年、夏季摂心会の際、村岡満義氏一行と劇的な出会いをすることになるが、それは後述する。

総持寺を送行して、インド佛蹟を巡拝し、伊藤喜三郎氏と初相見、一大転機に恵まれる。巡拝終ってタイ国ワット・パクナムで出家得度し、上座部佛教の僧侶として修行すること一年半、帰国して高階管長の秘書となり、さらに修行を志し、開教師としてロスアンゼルス禅センター（主管は師の実兄前角博雄師——母方の姓を名乗る——）に勤務すること二年、帰国早々新寺建立を決意し、直ちに活動を展開する。

新寺建立の趣意書に曰く

真の平和と人類の幸福は、正しい教えによって創られるものであります。物質文明と精神文化の不調和に悩む現代の私達の生活に、再び調和とやすらぎを取り戻すことは宗教によると信じます。

大聖釈尊のお説きになられた生きた正しい教えを

高揚し、世界平和と人類福祉の向上に貢献いたしたく横浜市日野公園の一角に、佛祖礼拝、祖先崇拜、参禅道場、青少年教化センター、また多くの人々の心の憩い場所として新寺の建立を發願いたしました……（以下略）

こうして新寺建立はその緒に付いたのであるが、これが軌道に乗り、發展の道を辿るには、それを支えた大きな力があるわけであり、それは何なのかについて述べてみよう。

恵まれた出会い

昭和五八年五月二八日、開創十五周年記念式典の際、開基家の代理として出席した株式会社ナリス化粧品常務取締役東郷敏氏は祝辞の中で次のように述べている。

私が方丈とめぐり会いさせていただいたのは、総持寺の夏季摂心におきまして、たしか昭和三八年で

あったと思います。その時に私、はじめて、先代社長開基に連れられまして、唯給料のためにといいイヤイヤながらも坐禅にいつて参りました。その時に、私は人より筋肉が堅く坐れないものですから、とにかく姿勢が悪かったのでしょう。もうほんとうに感情こめて叩きあげられる方がありましたので、坐禅よりも私は恨みを持って、その御当人を確認させていただいたのが、只今の方丈であるわけです。それで、私のその恨みは消えるものではございませんので、いよいよ打ち上げの日に、私は先代や現社長とともに帰り仕度をさせていただいております。そこへ飛び込んで来られたのが只今の方丈でございます。私は申し上げたんです。

「先生、悟りというものは何ですか」と。そしたら先生は、「ワツハツハツ。悟りがわかれば、私はこんな所におりませんよ」

アレッと思いました。この人はお坊さんなんでしょうけれどもわからん。われわれといっしょだったんだ



東郷敏氏と共に

なアと思いい何ともいえない親しみと、何ともいえない安堵感をもちまして、ひよっとしてこの先生と将来連れ立って、ついてゆけば将来いいことがあるんじゃないかと、そのような気がしたもんですから、先代に、実はこの方が一番強く恨みを持って叩いて

おった……あの叩きには何かワケがあるのではないか、是非会社にお呼びして私どもの坐禅の指導をしていただきたいものだと申し上げましたら、それはいいことだ、ぜひ呼ぼう、ということでした。三日目でございました。総持寺に電話させていただきました。

「こういうことでございますので、先生、社員教育においていただけませんか」と申し上げましたら、「いかせていただきます。いつですか」と、おっしゃるから、

「あしたです」といったら「いきます」といわれて、おいでいただいて、その時二泊三日会社を休んで全社員が坐禅をご指導いただいたわけでございます。私は、叩かれたことに対し何か反抗的にもお返ししたい気持ちございましたので、幹部社員十五人ぐらいと、何とか仕返しのための打ち合わせをして、先生をこらしめるにはこれしかないというんで、とにかく、全員が最初から最後まで、警策を受けるため

合掌をしつづけていこう、そうすれば叩かなければいかんのだから、叩き続ける先生はきつと参るだろうというんで、さア、一時間に恐らく三百ぐらいの警策を受け続けまして、私たちの衣は破けますし、血はふき出ますし、一方先生の手はだらんと息づかいはハア／＼、手は豆がはじけて真赤になっています。先代が申しました。

「お前らは坐禅ではない。あれは喧嘩だ！ あんなことをしたらいかん……」と、いうわけで、傷だらけの中ではじめて先生に対し男が男に惚れるといましようか、闘いのあとに心と心が結びあい、とにかく抱きついて、共に生きたいという、そんな気が培かわれまして、以来深いご縁が続いたのであります。先生はそれから間もなく総持寺での修行を終えられ、間もなく大阪に來られて、

「社長、インドとタイにいきたいんだが」ということで、お釈迦さんの生誕の地で修行なざりたい様子、それには一銭の金もありません、という

ことで、それならばというんで、社員こぞって協力
させていただいた訳です。一年後インドとタイから
帰られて、まだその報告の口がかわかぬ間に、今度
はアメリカに行つて坐禪の布教をしたい、とこうお
っしゃつて、またアメリカの方へお行きになられる
訳です。とにかく先生と付き合つてからは私たちは
追いまくられ、先生が来られると、ゾツとすること
ばかり続く。けれども先代の社長という方が、なん
にも言わずこの方に、この方に、ということをやつ
ていきますと、その心が会社の結束、ナリスの利益
に還元され、不思議とナリスは先生を知ることによ
つてどんどん売り上げもあがり、利益も上げさせて
いただきました。ですから、先生とのご縁は更に深
まり、佛の道を通して先生はナリスの利益、貢献に
大きくお力添えいただいたわけでございます。私た
ちはあきんどでございませうから、きれいな心は持ち
合わせておりませう。でも、もうけたお金をどんど
ん人様のために使つてくださるのが先生だったわけ

でございます。

そして丁度十五年前でございます。今日の十五年
は先生の結婚十五年でもあるのです。たしか七月で
した。私が東京に出張して参りました時、先生が東
京の支店においてになりました。



ナリス化粧品村岡社長

「先生、また何ですか」といったら、

「実は東郷さん、これなんだけど……」

「これって何ですか」

「ちよつと見てくれ」

と見せてもらったのが、あばら屋が一軒の写真だった訳です。

「実はここにどうしても寺を興こしたいんだ。私は急いでるんです。心の救済を、私、やらせてもらわなければいかんのだが、お金がないんじや」と。

「ホラまた来た」と思つて、「そら先生、簡単にお金は集まるもんじやありません。会社もそういつまでもお金があるものではありませんけど、先生がおつしやるのだから社長に話してみますが、いくらですか」といったら、

「七百二十万円かかります」と。今から十五年前でございいますからいまなら丁度一億ぐらいのお金に感じます。

「それじゃ先生、ほんとうに買うんですか」

「買いたい。きまつた会社のお金よりも一人一人の小さなお金がほしいんです」と、貰うについても条件をつけられるわけです。ほんで、「東郷さん、あんな北海道から沖繩まで歩いてるから、その間に、できたら一人一人話をしてお金集めてくれないか」といわれるから、訳もわからぬまま私は約束をしてしまい、

「じゃ先生、集めましょう。何年ぐらいですか」といったら、

「三ヶ月です」とおつしやるんです。

「そりや先生、三ヶ月じゃ集まらん」といったら、「あの土地も家も、三ヶ月時間をおいてしまつたら無くなります。誰かに渡つてしまいます」と、それはもう一方的なんです。

私も今まで物を売ったことはございますが、けれども思想とお名前でお金を集めたことはなかつたのです。それで社長に申し上げまして、北海道から沖繩まで小銭を集めて廻り、約千名ぐらいに達したと思

います。

話は前後しましたが、その時です、その話を終ると同時に、

「東郷さん、実は今日、私は見合いをします」と。

「見合いって何ですか」といったら、

「実は、もう独身協会会長をやめて、私も結婚する気になった。寺を建てるにはやっぱり女房がなくてはいかん」

「そりやね、先生、困ります。金は欲しい、結婚はしたいでは困るんです。それで見合いはいつ、どこですか」といったら、

「不忍の池の、あのホテルのロビーです。この話が終れば、私、そこにいくんです」

「そりや先生、困ります。その女の人を断ってください。断われなければ、先生、私が行って断ってあげます」

と申し上げ、結局私は先生といっしょにその見合いをぶっこわしにいったわけです。そして、今度は

私の方から、

「先生、永平寺の単頭たなぢ老師のお嬢さんで、倫子さんという方がナリスの社員で、社長の秘書でいらっしやるんです。あの方をもらってください。好き嫌いの問題ではありません、お金の問題です。あの方さ



えもらつてくだされば、あの方の名前を使って、私はお金を集められます」といったんです。さいわい先生は、倫子夫人に一目惚れでございました。そしてついに十一月に千名の方から約一千万円のお金が集まりました、このお蔭で、善光寺の第一日、第一歩があつた訳です。それで、先生の心意気というか情熱とおうか、私もこの先生のすべてに傾倒してしまいました。ナリスの先代をはじめ現社長は、できる精一杯を善光寺に尽され、ほんとうにこの方に惚れてしまつてからは、何かとさらにさらに深く繁つて心を通わせているうちに、会社もいよいよ発展し、善光寺は黒田大圓和尚の全人格が表現され、まことにもつて隆々とした、善光寺の足跡を見させていただくことになりました……

長々と引用したが、開基家及びナリス化粧品との出会い、そしてその後の緊密な関係、さらには黒田師の人柄を知り、発展の軌跡をさぐるには、ぜひ一読してもらいたい一文である。

次に伊藤喜三郎氏とは、昭和三八年十二月、伊藤氏がインドに癩センターを設計され、その竣工式に出席された時たまたま初相見の機会に恵まれ、いっしょに四大聖地を巡拝し、伊藤氏は帰日し、黒田師はタイに残るといふことでバンコックでご馳走にあずかり叱咤激励されたのが縁で伊藤氏からも格外的協力をいただいている。それに石屋さん。月刊『任職』（四五年八月号）に、「檀徒急増の理由」として、黒田師は質問に答えて次のように述べている。

「数だけでいえば、年間二百世帯の割り合いで増えています。理由はいろいろありますが、立地条件がいいんです。日野霊園には三万基の墓碑があり、菩提寺を持たないものかなり（約四割）あるんですよ。そういう人たちが入檀しています。また霊園の周辺には十軒の石材屋があります。その店の紹介で入檀するケースも多いんです」

こういう恵まれた立地条件なのに、日野町にある六カ寺の住職は、黒田師を除いて多くは二足のわらじば

きて、日曜日以外は寺にいない。そこへもつてきて、黒田師は、葬式の場合など、「お金はいりませんヨ、誠心誠意やらせていただきます」ということをモットーにして実行して来ている。そこで葬儀屋や石屋がバックアップしてくれ、口コミで檀家がどんどんふえ、当初の目標は檀家三百戸獲得。次は五百、八百と目標をアップして開創五周年の時は六百、昭和五三年、十周年の時は千軒を越すといった状況である。

次に、佛さまとの出会いについて一言したい。

黒田師が三十歳になって、インドの佛蹟巡拝をしてタイで修行しようとした時、世の中に何も残してないわが身をふりかえり、もしタイで修行中万一の事があった時、佛さまだけでも無事帰れるようにと念持佛を作ることにし、永平寺の門前で山口という佛師を訪れたところ、素晴らしい不動明王をお受けする機縁に恵まれ、外遊中は師寮寺に預かってもらい、帰国して新寺建立とともに勧請したのが身代り不動明王、この不動明王は常に身を変じてどんな願いでも叶えてくださる

と黒田師は確信している。それから円空佛と中国元朝時代（一二六五〜一三五二）作の聖観音、これは伊藤喜三郎氏の寄進によるもので、前者の働きは日限不動



伊藤喜三郎氏

明王で、日に千里の行程を往還するという。後者はおよそ禱祈するあれば必ず感應を蒙るといわれる。それから七宝焼きの釈迦像、これはお姿は釈迦像だが薬師さまのはたらしをなさる。その他、タイ、ビルマの佛像を実に数多く勧請しておられる。それから、開創十周年記念事業として、般若心経一万巻写経と聖観音さまの勧請を發願した。これは高村光雲の弟子で、鑄型では第一人者の沢野盛一氏に製作を依頼した。高村光雲が七十年前に聖観音をつくられ、それが出世作となったが、それを鑄造したのが沢野氏で、爾来、沢野氏は高村光雲に認められて出世するのだが、高村光雲の出世作聖観音像を三尺三寸に拡大して世に残したいというのが沢野氏一生の念願だった。その念願を叶えさせてあげることが出来、その因縁と心経写経一万巻納経の勝縁によって釈迦殿建立の土地を入手することができたという。

それから黒田師はかねて、宗祖を通して釈尊に還る、ということ念願としていた。日本一周旅行も実は各

地の佛舍利塔参拝が最大の目的だった。そうした願行に自然と舍利塔が沢山集まることにもなった。また、黒田師がワット・パクナムで修行中、住職のプラ・ダンマテラララージャマホームニをお願いして、高階管長と真如苑にお佛舍利を奉呈していただいたが、その際黒田師も奉戴した。その年の秋、タイのチェンマイで世界佛教徒会議があり、高階管下と真如苑教主が日本代表で出席された。その折、ワット・パクナムに答礼に行かれたが、そのお世話をしたお礼として真如苑から、教主謹刻の涅槃像をいただいている。

こうした実に多くの佛さま方によって黒田師は護られているのである。

寺門経営

黒田師が手始めにおこなったのは日曜学校だった。鶴見大学の保育科の学生を三、四人呼び、近くの子ど

もたちを集めておこなったが、どんどん檀家がふえて寺務が多忙になったため、これは三年でストップし、寺本来の事業に専念することになった。現在おこなわれている善光寺の年中行事は次のとおりである。

新年祈禱会	一月
節分会	二月
開山忌 定例総代会	二月
青年会総会	二月
春彼岸法会	三月
花まつり法会 婦人会総会	四月
婦人会研修会	五月
不動明王大祭	五月
大施餓鬼会	七月
棚 経 (お盆供養)	七月
本寺光真寺参拝 参拝旅行	七月
医事・身上相談	九月
秋彼岸法会	九月
お茶会	十月

七五三祈禱会 十一月

成道会 十二月

写経会 毎月第一土曜日

参禅会 毎月第二土曜日

佛典研究会 毎月第三土曜日

茶道教室 (裏千家) 毎月第一、第二、第三月曜日

寺報『成寿』発行 年四回発行不定期

実に多彩な活動を展開している。黒田師は、寺は行事さえすれば檀家はふえるとの確信のもとに行事の充実をはかっている。はじめは大分苦勞したらしい。昭和四五年二月はじめて節分会の行事をおこなったが、その時は本寺光真寺から福マス三十個を借りて来て、光真寺の焼印の上に紙を張ってやり、お客はたった十人だったというが、今日では数百人になっている。

行事は単発でなく継続して実施することが大切であり、また必ず法話を入れる。法話のない時は咄家を呼んだり、または、福引きやバザーなどをおこない、参詣者に、寺との交流、参詣者相互の心のふれあい、そ

して物心両面のおみやげを持ち帰ってもらい、寺に来てよかったというよろこびとやすらぎを得てもらおうとつとめている。

関係団体の活動も活発である。関係団体は次の通り。

- 成寿山善光寺護持会
- 成寿山不動明王奉讃会
- 成寿山善光寺參禅会
- 成寿山善光寺写経会
- 成寿山甲子大黒天講
- 成寿山善光寺青年会
- 成寿山善光寺婦人会
- 成寿山福祉相談所
- 成寿山善光寺子供会
- 成寿山善光寺茶道会
- 成寿山善光寺佛真会

行事はこれら関係団体とタイアップし、または関係団体が独自でおこなう場合もある。ここで特異な行事を紹介すると、



茶会風景

前記医事相談である。善光寺檀徒総代防衛医科大学教授中村治雄氏が毎年九月十五日敬老の日に無料健康診断をおこなう。中村氏はいう。「黒田住職のすばらしいアイデアです。これまで多くの方々を診てますが、病気を発見した例もいくつかあります。この相談では専門医の紹介までおこないます。カルテはお寺に保存してあります」

葬式佛教から脱皮した多彩な活動を続ける善光寺であれば、事務局がしっかり確立されなくてはならない。事務局員は現在では五十名のスタッフがおり、その職業は、会社社長から医師、デザイナー、司書、タクシ―運転手までさまざまで、まさに総合プロジェクトチームである。法要の数が多いので典座寮々員の数も多い。

むすび

都会の寺でさえも兼職を持っている住職があるくら

いなので、過疎地帯の寺であれば、兼職なしには食輪が転じない。

その際、出来得れば第一種兼業、つまり用僧によって収入を得ることは誰しもが望むところであるが、それにこたえる寺がなかったり、あつてもお布施が少なかつたりして、止むを得ず第二種兼業に走らざるを得ないのが大部分であろう。これは宗門的な大きな問題であるが、何等の措置も講じられていない。黒田師はこの状態を憂い、檀徒数の少ない寺と密接な連けいを取り自らの檀務を処理するとともに小寺院のヘルプに意を用いている。

今後の寺院経営に必要なのは人である。一にも人、二にも人、黒田師はこの考えのもとに、しっかりとブレインづくりに努力し、併せて人材育成に意欲を燃やしている。その一環として近く発表を予定しているものに海外留学僧派遣育英会の設立がある。アメリカやタイに留学僧を派遣し、将来の善光寺のブレインとするとともに日本の佛教界に寄与しようという遠大な

計画である。

最後に、善光寺開山は黒田武志師の本師棟庵白純大和尚であり、黒田師が日野の小庵を入手し得たのは棟庵白純大和尚が総持寺副監院在任時の勝縁によつたものである。



医事相談中の中村治雄氏

大だいなる哉かなこころ

黒田大圓

(武志)

暗中あんちゆうもぎく模索

私は、通常、男兄弟七人のうちの五番目といっておりますが、実は長兄が四歳の時、大腸カタルで亡くなり、その化身けしんが子育地蔵こぞだぞうとして実家の寺にまつられておりますので、戸籍上は、八人兄弟で、私は第六番目ということになります。

何しろ、男七人の兄弟ですから、両親はたいへん苦勞らうしました。栃木県の大田原というところで、田舎町

です。お寺は、伽藍は非常に大きなものですが、経済的には決して裕福ではありませんでした。

学校には入れてやるが、卒業したら一切かまわん、勝手にやれというのが父親の教育方針でしたから、学校は入れてもらうことになりました。

しかし、皆さんも同様だと思えますが、学校はどこにしよう、卒業したらどこに就職しよう——これは青春時代の実に大きな問題であり夢でもあります。私は高校は大田原高校でしたが、田舎ですと、やはり早稲田、慶応というのが憧れの的でした、金がないから

慶応は入ったとしてもうまくいくまい、早稲田を出て学校の先生になろうか、というのが夢でした。それでかなり一生けん命受験勉強をしたつもりです。

三年生の夏休み頃、二番目の兄が開教師としてアメリカに渡ることになりました。私は、世界中で勉強してみたいというのが小さい時からの憧れでしたので、兄が行くならぼくも行きたい、一体将来どうしたらよいか、と兄に相談しましたところ、「お前は坊さんが似合う。親爺にもそのことを話している。そのほうがいいよ」というんです。

「そうですか。みんながそういう意見なら、坊さんになりましょう」ということになり、坊さんになるなら駒沢だということで、駒沢大学に入りました。それで、駒沢を出まして、アメリカの兄に、「ぼくもアメリカに行きたい」と手紙を出しました。するとこういう返事が来たんです。「四年制の大学を出たぐらいじゃ、アメリカ人に仏教など説かれるものではない。せめて大学院ぐらい出ろ」と。そこで大学院に進みました。

大学院を出て、早速手紙を出しましたら、「大学院で二年や三年勉強したって何にもならんよ。坊さんなら修行が必要だ。修行しろ」というんです。そこで総持寺に行きました。修行といいますが、世間的にみますと、全く下積みの仕事です。当番にあたれば起床は二時、みんなが寝ている間に雑巾がけをし、みんなが起きて坐禅する前に火をおこし、その上、古参の雲水の部屋を掃除して火を入れとくんです。それで金が貰えるわけじゃなく、月に五百円か七百円ぐらいの手当



です。全くやり切れない気持ちで、いやいやながらつとめました。これをやらんと資格がもらえないんです。高校卒ですと五年かかるんですが、大学院を出てますので半年で資格がとれるんです。資格を貰ったので、また兄のところの手紙を出しました。「半年修行して一応形はととのいました」と。すると、「お前、半年や一年の修行で何ができるものか」と、大目玉を喰らったのです。そういわれてみれば正にその通りで、いやながら半年がまんして資格を貰ったところで、何一つ身につけてないのです。手紙には、「永平寺に行け」と書いてあるものですから、これまたいやいやながら永平寺に行きました。こんな気持ちで修行しても何もならんことなのですが、その頃の私にはまだそれがわかってなかったのです。

僧堂に入れてもらうには、まず「旦過寮」に入らなくてはなりません。旦過寮というのは、いわば僧堂に入るための準備教育をするところで、朝の三時から夜の九時まで、十八時間も坐らせられます。普通一般に

は一週間か十日ぐらい入れられますが、私は「こいつは生意気だゾ」とマークされたのでしよう二週間も入れられました。「こんなところにおつてもつまらんア。早く娑婆に出て勉強せんと時代に遅れてしまおう」——こう思ってるうちに痔が悪くなって「延寿堂（病室）に入れられたんです。

ところで私は、大学では茶道部の会長をしてましたし（今もOB会の会長をしますが）、また、世話好きなほうでしたので、先輩、後輩の中に親しい人が多くおりました。そんなわけで、親しい後輩の一人が、永平寺名物の播粉木羊羹をころもの袖にかくして差入れにやって来たんです。そこで考えさせられました。「こんな風にみんなに迷惑かけちゃ悪い。大体こんなところは修行にならん」ということで、「体の具合も悪いので、しばらくの間お暇をいただきたい」と願ひ出て、体裁よく永平寺を逃げ出したのです。が、困ったことに金がないんです。一銭もなかったんです。それで後輩から千円借りまして、永平寺をたつて福井まで出ま



大本山永平寺安居の時

したが、バスや電車に乗ったりすると、百円、百五十円となくなるんです。心細かったですね。その当時東京まで千二百円ぐらいかかるのですが、八百円しかない。そこで托鉢をはじめまして、福井の市内を一巡したら夕方になりました。「四、五百円ぐらいはあるかな、東京に帰れるだろう」と思い、托鉢をやめていそいで電車に乗ろうとして、切符を買おうとしたのですが、金が中々出て来ないんです。すると駅員は「では入場券でお入りなさい。中で精算してください」という。北陸ではお坊さんを大事にしてくれます。これは有難いと心に感謝して、入場券をにぎってホームに出たんです。すると、上り下りの急行が同時にホームにとまっております。ベルが鳴りひびいております。その時は早く東京に帰りたい一心で、ホームを走り、飛び乗り、これで東京に着ける。よかった、よかった。金が足りなければ、行けるところまで行こうと「思いまして、托鉢でいただいたお金を窓ぎわのところに、十円、二十円と積みました。うれしくて夢中でした。四百五十

円もありましたので、もう大丈夫だと安心しましたら、車掌のアナウンスがあるんです。聞いてると「この列車は富山を経由して直江津に行く」というんです。なに？ 直江津？ こりや、えらいことだ。あべこべだ。金はあとわずかしかない。えらいことになった。そこで車掌さんに聞いたんです。すると、直江津に着くのは十時ぐらいとのこと。その頃は寒い時でしたので、こりや、体に悪いと思ひまして、富山で下車したんです。

富山には、総持寺で修行していた私の大学時代の後輩がいるんです。自分のお寺ではなく、よそのお寺に用僧もちそうといってお手伝いをしておりましたので、その彼をたずねてゆきました。八時半ごろ富山の駅に下車して、手甲・脚絆・草鞋わらじばき姿で歩いてゆきました。お寺では九時には「開枕かいまくら」といってみな休むのです。「ごめんください」「ごめんください」といっても中々出て来ないんです。しかし、帰るわけにもいきません。行くところがないのですから。ようやくして「おー」と



大本山総持寺安居の時

いう声^{こゑ}がして戸を開けた若い雲水、それが私の目指した後輩の松本君だったのです。

「黒田先輩じゃないですか。永平寺へ行ったと聞いてました^が。どうした？」

「いま、永平寺を乞^こ暇^かして来た。肝臓^{かんぞう}が悪いし痔^ぢが痛くてやり切れんから逃げて来た。今晚泊めてくれ！」

「そうか——」

「とにかくあがらせろよ」

といった具合で、ようやく草鞋を脱ぐことができた。酒も呑みたかつたんですが、痔に悪いので一合ぐらいでがまんして休ませてもらおうとしたら、松本君が、

「あしたからどうする？」というんです。

「どうしたらいいだろう。金がないんで千円借りて、托鉢^{たくはつ}したがこれしかない」

「そうか、じゃ、オレ二千円貸してやるよ。だけど折角来たんだから、明日、托鉢して帰れよ」

そこで次の日、朝九時から三時まで托鉢したんです。

富山は仏国^{ぶつこく}ですから、一円、二円、十円という風に、どこの家でも喜捨してくれるんです。お金^{かね}が応量器^{おうりょうき}(食器ですが、托鉢の時はこれをささげ持って、お金を入れてもらいます)いっぱいになりました。帰ってかぞえてみたら八百円ほどあるんです。そこで松本君に言っただけです。

「こんなにあただけるんじや、一日では勿体ない。もう一日させてくれ」

といって二日目をやりました。やはりたくさんいただきました。そこで千円札に両替してもらって、仏様におあげしました。貰ったものは必ず、まず仏様におあげして、それを仏様からいただくんです。

松本君がいうんです。

「黒田さん、折角ここまで来たんだから、もう二、三日托鉢したらどうです。それから能登を托鉢したらいいよ」

「あそこも仏国だし、それに総持寺の祖院がありますからねえ」



ここでちょっとつけ加えますが、鶴見に大本山総持寺がありますが、もともとは能登にあつたんです。それが八十年ほど前に火災で焼けてしまいました。当時の人は偉かったですねえ。永平寺が福井の山奥にあつて、総持寺が能登の突っ端にある。これでは地理的に片寄り過ぎています。禍いを転じて福としなくてはならぬとて、鶴見に移転したのです。そこで、大本山総持寺の祖院にお詣りしようと思つて行きました。もち論托鉢しながらです。いやア、お金がたまるんです。こんなうまい仕事はない。一生けん命やったら金の使い途に困るんじゃないか。そう思つて、来る日も来る日も托鉢を続け、ついに日本を一周することになります。それにはまた別のワケがあつたのです。

日本一周托鉢行脚

話は前に戻りますが、永平寺に修行に出かけようと思つて、その用意をしておつた時のことです。

それは九月のお彼岸の時でした。たしか、彼岸に入った次の日でした。私はその頃、東京五反田にある小さな寺におりました。ほんとに小さな寺で、彼岸にもあまりお詣りがありません。夕方になって、もう誰も来ないし、一杯呑もうかと思つてると、ガラツと戸が開いたんです。寺といつても、本堂が八畳、その隣りに六畳間があるだけです。戸が開いたんで、想像を絶する小さな貧乏寺なんです。戸が開いたんで、台所から出て本堂へのぞきますと、一人の男が真ん中に坐つて、本尊様を拝んでいるんです。

気になったものですか、「どうしたんですか」というと、

「私は殺されるんです」といふんです。

これはただ事じゃないと思ひまして、わけを聞きますと、「私はやくざです」と言つて、パツと手を開いてみせるのです。斬りキズがあるんですが、一度や二度のキズではないんです。そして、「足を洗わしてくれ」といふんです。

「実は昨日、借金の取り立てに行つて来たんです。いや、やらされたんです。ところが、その家にあつたのは、テレビとタンスと子供の机ぐらいのものなんです。親分はみな持つて来いといふんです。しかし、テレビは子供たちが見ている。可愛想にと思つたが、親分の命令に従わにやならんで、トラックに積んだんです。お母さんと子供は、『あんなら狼だ、鬼だ』といふんです。そんなにまで言われて生きるのは真ツ平だ。そう思つて、夕べ足を洗う決心をして、逃げて来たんです。つかまれば殺されます。そこで和尚さんに相談に来たんです」

というんです。私は大学院を出まして半年足らずの頃でしたから、娑婆の血生臭い話など、どう処理したらよいか見当もつきません。それで、「殺されちゃ大変だ。どうしよう」と真剣に考えたんです。そして言いました。

「あなたを救える道は警察の力を借りるしかない。いますぐ警察に行くか、暗くなつてからにするか、とに

かく警察に行こう。ここは荏原警察と大崎警察の縄張りの境い目で、この寺は荏原警察の管区だが、警察に行くには大崎警察署の方が近い。しかし、人目につきやすい。荏原の方は交番がすぐ近くにある。だがちょっと頼りないかなア……」

ところがその男は、「警察には始めから終りまで迷惑かけようして、これ以上お世話になつたんじや申手が立たないから、逃がしてくれ」と、深刻な顔で合掌して頼みます。そこで私も男気を出して、

「よし、俺はあんたを逃がしてやる。だけど、つかまつて殺されたらどうする」といったら、「それでもいい」というんです。

「よし、殺されてもいいというんなら、あんたは本当に俺に命をくれるか」というと、「あげます」といい、ナイフを取り出し、「ここで死なせてくれ」というんです。

「ちよつと待ってくれ。ここで死なれたんでは俺が困る」さてどうしようと考え、「あんたが本当に殺され

てもいいんなら、俺はここから逃がしてやるが、どこか日当てがあるのか」と聞くと、「北海道へ行きたい」というんです。

「そうか、北海道か。こりや二日かかるなア」

その頃は新幹線もない時代で、夜行に乗って二日ばかりなんです。

「北海道に行くには金がかかるが、金あるのか」というと、持っていないですね。そしてネクタイもワイシャツもよれよれなんです。

北海道へ行ったつてすぐ仕事にありつけるわけではないし、金は持ってない。でも行かしてくれという。

私もホトホト困りましたが。「じゃ、待て」といって、お婆さんに話したんです。そして、「いったい家に金どのくらいある。あり金、全部出してみろ」といったら、「お彼岸のお経料が三万五千円あります」という。それから家の生活費を差引くと三万三千円は何とかなる。私は三万三千円を持って、

「これが俺の家の全財産だ。これを全部あなたにあげ

る。旅費と職を探すまでの費用にあてなさい。しかし、あなた、ネクタイもワイシャツもボロボロじゃないか。北海道は寒いんだよ。といつてもこの金でシャツ買ったんじゃないか」

そういつて、私のワイシャツとズボンをやり、学生時代に着ていたトレンチコートもやった。ちよつとダブダブだけど、袖を折れば何とか使える。背広は無理かな、ちよつとでかいけど着ろ、といつてふろしきに包んでやった。さらに、仏様からお供物をおろして、「これは汽車の中で食えよ。二食ぐらいは助かるよ」といつて逃がしてやったんですが、その時、私、ジーンとこみ上げてくるものがありました、

「何か思い残すことないのか」といつと「ありません」といつ。「殺されるんでもないのか。俺ならあるよ。あなた両親いるか」といつと「いる」といつんです。何処に住んでるとたずねると名古屋だといつんです。そこでムは、「あなたの最期の出会いはこの俺だ。あなたが殺されたら俺があなたの両親に会つて話してや



大本山総持寺特別僧堂安居の時

やるから、住所書きなさい」と、半紙と筆を出したんです。そしたら正坐しておもむろに書く瞬間に字を考えただんですね。人間、殺される時の心境はこういうものかと、私はその一部始終を見ておったんです。名古屋市中区……中村……三十八歳と書いたその紙を受取り、「これは俺が気づかるが、俺にはもう一つ心残りがある。あんたを今日まで育ててくれたのはご先祖さまなんだよ。そのご先祖さまにお礼だけは述べて行け」

といって、「中村家先祖代々之精霊」と塔婆に書いてお経をあげてやったのですが、その時また感じたんです。人間いよいよ殺されるということになれば、これがほんとの姿かなア」と。そして陽の沈むのを見て逃がしてやったんです。その逃げる姿がまた印象的です。ボロボロの靴をはいて、荷物を持ってターツと出て行っただんです。そしてそれっきり、何の音信もなかったんです。それで私は非常に心配したんです。これは殺されたかも知れない。そうすると私は大変な罪を犯したことになる。いや、えらいことしたなア。

菩提を弔らつてやらねばならぬ」と、そう考え、この時、全国を托鉢行脚しようという決意をかためたのであります。実は、「宗祖を通して釈尊に還れ」というのが私の誓願に似た気持でしたので、藤井日達上人のお力で全国各地にまつられておるお佛舍利を巡拝しようと思つておりました。それがこのやくざとの出会ひによって実現化することになったのであります。

大いなる転機

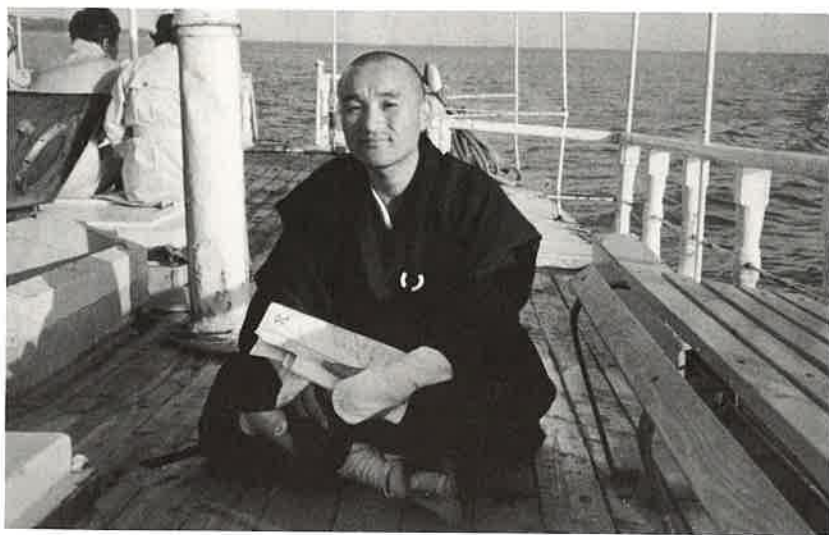
来る日も来る日も托鉢三昧の毎日が続きました。『般若心経』を読んで最後の真言「羯諦羯諦 波羅羯諦 波羅羯諦 菩提薩婆訶」を繰返して唱えるのですが、この真言は、「行こう、行こう、手をつないで共に行こう、苦しみ悩みのない世界に行こう」という意味でありますので、一心にその気になって唱えるのです。雨の日も風の日、昨日も今日もあさっても、毎日同じことをやっておったんです。



大本山永平寺勅使門前にて

あの網代笠というものはおもしろいもので、水平より上は見えないんですが、ちよつと顔を上げるとみんな見えるんです。おもしろいことにこつちでは見えても、向うからは見えないのです。そこでお店の前に立つと、きれいな娘さんが、手をふつて、邪魔だから行つてくれ、「お通り」というんです。そこでちよつと顔をみて、「へん、顔は美人だが心は鬼か。この俺に供養もしないような乾いた心では変な処にしか嫁に行けんぞ」と、まあそんな気持になるんです。また、ほんのちよつぱりしかくれないと、「こんな大きな家でケチくさいなア。もう少しよこしてもいいのに」などと思うんです。ところが一ヶ月、二ヶ月も続けていると、そんなこだわりがなくなるから不思議なものです。こうして、人間の生き方というか在り方というか、私なりにいろいろ身をもつて体験したわけであります。そして京都に行きました。十一月の末でしたが、三日間、台風で荒れ狂ったのです。三日間も暴風雨に見舞われますと金がなくなって来たんです。ここで平生

の生活ぶりをお話しますと、朝九時ごろ宿を出まして
昼まで托鉢をし、昼食をとって、午後ボツボツ宿探し
をします。お寺に泊めてもらうには、それなりの作法
があるんです。三時ごろに行きまして、「拝宿はいしやく宜よろしう」
と頼むわけです。そして泊めていただくことになれば、
草をむいたり、玄關の掃除をしたり、風呂をわかし
たりして泊めていただくのです。そして、その日托鉢
でいただいたものは、そっくりそのまま全部仏様にあ
げるんですが、それを返してください。その時、草鞋
銭といって、新しい草鞋を買うお金として百円か二百
円くださるんです。ですから、お坊さんをしている限
りは生活に困ることがないんですが、中々泊めてくれ
るお寺がないんです。方丈が留守だからとか何とか理
由をつけて断わるんです。物騒な世の中ですから無理
もないことなんです。こうして泊めてくれる寺がない
時は、木賃宿に素泊りさせてもらうんです。二百五十
円か三百円で泊まりますが、ノミが出てくるようなと
ころで寝なくてはなりません。ですから三日間も暴風



能登の外洋船上にて

雨に見舞われると托鉢ができませんし、お金が底をつくようになるのです。托鉢する坊さんは、「涅槃金」といって、不慮の死をとげた時の葬式の費用を常に携帯しているのです。お袈裟と経本と涅槃金、それに「三物」といって、仏法の世界での身分証明書、これは坊さんの誰しもが持つてなくてはならん大事なものののですが、その涅槃金、私は千円持つておりましたが、いよいよ一銭もなくなつたので、その千円の涅槃金に手をつけはじめたんです。そしていよいよ五百円足らずになりました。

京都というところは、大きなお寺はまず泊めてくれません。小さな尼寺のようなところをあたってみるのですが断われます。雨は止まない。ズブ濡れて京都の郊外まで出かけて行くのです。庵主様がない、方丈が留守だから「別のお寺でお願いしてみてください」「何処にありますか」ときくと、「四、五百メートルいくとお寺があります。そこなら泊めてくれます」というので、そこへ行ってみると、「今日はね、お寺の

お客さんがあるから泊められない。もう少しさきにお寺がある」というんで、教えられた通り行ってみると、案の定断られる。仕方なしに京都の駅に行つて、「一番安く泊めてくれるところはないか」と、観光案内の人に聞くと、「亀岡に行つて探してごらん」というので、電車賃かけて行きました。お金は三百五十円だけになりました。亀岡の駅から五、六百メートル先に、傾きかけた家があつて、頼んだら「二百五十円で泊める」というんです。朝から雨に濡れてびしょりです。風呂に入りたいといつたら、先客がさきだからまだあとだとのこと。いつ入れるかというと、わからないというんです。「では銭湯ありますか」といつたら、近くにあるというので、コーモリ傘を借りて風呂屋に行きました。こうして金は次々と出てゆき、九十円足らずになつてしまいました。それでも酒が呑みたい。酒屋に行つたら、一番安いもの、四十五円という一合ビンがあつたので、それを着物のたもとにしるばせました。あと四十五円残つたので、十円のコッペパン一



つにバター一つ買いました。そして旅館に帰って、酒呑んでパンを食べながら考えさせられましたねえ。

人間の命なんて安いもんだ。たった九十円か。さて、明日はどうしよう？

翌朝四時頃、ザーッと雨が降っている。こりや、えらいことになった。金はないし、何処へも行けない。七時になってもまだ雨は止まない。八時になった。その時ハタと気がついた。俺は坊さんだ。坊さんは何をやるんだ。何が出来るか。お経あげることしかないじゃないか。そうだ、お経だ」と。

そこで、まだ半乾きのころもを着て、その木賃宿の主人に、「お願いしたいことがあります。お宅のご先祖にお経をあげさせてください」と頼みました。すると、主人、夕べ風呂に入れてくれなかったその主人がその家の仏壇の前に坐らせてくれました。私はありつたけの声を出して精一杯読経しました。お経が終るとその主人は「本当にありがとうございました」と礼を述べ、「先生、おなか空いてるでしょう」ということ

ではじめて白いご飯にありついたので。普通ならお布施をくれるんですが、ご飯がお布施代りなのです。

そこは人間です。欲をかいてはいけません。ご飯をご馳走してもらえればこれ以上のことはない。そこで私は空を、天を仰いでみましたが、まだまだ晴れそうがない。しかし托鉢しないと金がないので、雨の中を外に出たのです。宿の主人が、「もう少し小降りになってからにしたらどうですか」というんです。私は「お気持は有難いが、いつ止むかわからないので出かけます」
「どうせここにいたって五分は五分、一時間は一時間。それより外で精一杯読経した方がましだ」と思って、
「羯諦羯諦 波羅羯諦 波羅僧羯諦 菩提薩婆呵」と唱えながら街を歩いたんです。雨ですからどこも戸が閉ってますから、誰も相手にしてくれない。ところが、二時頃になって雨が止んだんです。女子高校の近くを通ってる時でした。学校から出て来た女の子の一団とパツタリ出会ったんです。私は男ですから、女性は嫌いじゃないけど、その時は女性も何もない。

ただひたすらに大きな声で「羯諦羯諦……」を唱えてました。するとどうでしょう。女学生たちが全部集まって来て、一円玉やら十円玉やら、ジャンジャン容量器に入れてくれるんです。見る見る間にいっぱいになりました。そしてその時、太陽がパーと射したんです。そこで私、気がついたんです。人間は絶対に死なない。人間は救われてるんだ。念ずれば花開くんだ。正に万感胸に迫る思いでした。その時私は二十七、八歳でしたが、やっと、生かされている尊さを知らされたのです。それからというものは、もうこわいことも、うれしいことも、すべて超越して、これでいい、という心境になることができました。

そうしたいろんな出来事に出会いながら、日本を8の字にまわって名古屋に来たんです。丁度お正月の二、三日前でした。その時私は二、三千円の金を持っておりました。二、三千円持っておったんでは勿体ない。托鉢すれば金はどうにでもなると思って、朝日新聞社に行き、その金を歳末助け合いで使ってほしい、と差

出したのです。それでスツテンテンになりましたが、二十円残りました。その時私の頭をよぎったことは、逃したやくざのことは常に気にしていたのですが、名古屋に來たんだから、その両親のところをたずねてみようと思つて彼が紙片に書いた住所の近くの交番に行つたのです。朝の八時ごろでした。丁度勤務交替の時でした。交番の前のコンクリートに坐つて袈裟文庫の中から住所を書いた紙片を取り出して、たずねたんです。「ちよつと待つてください。調べてあげますから」といつて調べているんですが、五分たつても十分たつても何の返事もありません。私はきたない恰好してるから、交番に入つちや悪いと思つてコンクリートの上に坐つている。やがて私を呼ぶので入つて行きましたら、「先生、お坊さん、これ悪いけどねえ、この住所ないですよ」というんです。その時ハツと気がついたんです。ああ、だまされたのか。しかし、その詐欺師のおかげで私は日本中の仏舎利塔の巡拝が出来た。だまされたおかげで本心に尊い修行をさせてもらった

のです。私は呵々大笑して、人生はこんなものだ。これが娑婆だ。と思ひました。しかし、さすがにその時は肩の力が抜けました。いや、全身の力が抜けたというのが偽らざる心境だつたと思ひます。

そこで、さてどうしようか。まず腹ごしらえをしないでとはとて、子供の雑貨を扱つてゐる店に行つて十円のパンを買いました。

平常心是れ道

名古屋には三番目の兄の女房の実家があります。そこへ泊めてもらおうと思つて、電話したら、番号違いでガチャンと切られてしまいました。これで無一文になつてしまいました。万事休すではすまされぬ。野球場の近くだと聞いていたので、五、六キロの道をテクテク歩いて、どうやら辿り着くことができた。

「丁度いいところへ來た。実は家中であんたを探して

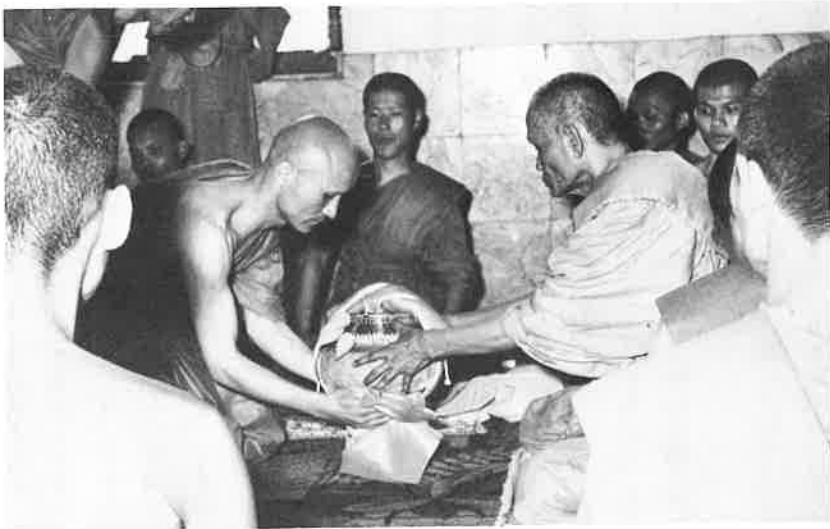
おつて、『そちらに行つたら電話してくれ』と、何ヶ月も前から頼まれていたんです」とのこと。

その理由は、二番目の兄が十年ぶりにアメリカから帰つて来て、ぜひ会いたい、といつてるとのこと。

「じゃ、悪いけど金を貸してください。私は一銭もないんです。三千円たのみます。家に着いたらすぐ送ります」

と言つて金を借り、夜行で東京に帰り、東京で身仕度をして栃木の実家である大田原の寺に帰り、十年ぶりの再会を喜んだのです。もち論、長兄もおりました。私は得意になって、「私はあるとあらゆることをして来ました。大変いい勉強をして来ました」といったんです。ところがアメリカ帰りの兄は、「そうだなあ、えらいもんだなあ、お前よくやったなあ」とほめてニコニコしてゐるんです。ここでやめればよかったのですが、調子に乗つていい気になって自惚れ話をしたんです。すると長兄が、

「お前そんなに得たものがあるんなら、ここに出して



タイ国ワットパクナムにおいての得度式

みる」

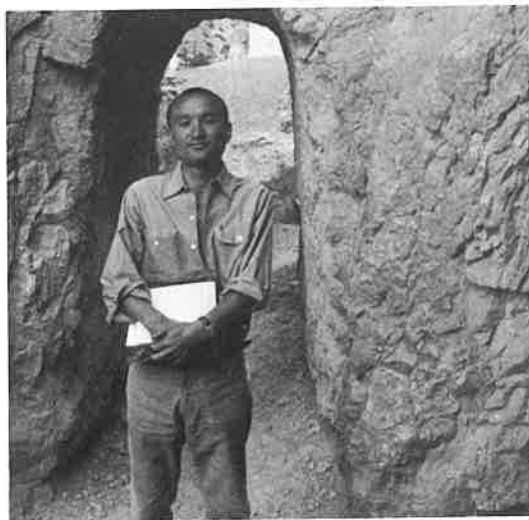
というんです。そういわれてみると、何も出せるものがないんです。そこでいやというほど修行未熟に気が付き、これはいかん、人間修行しなくちゃだめだと、目が覚めたのです。

丁度その時、大本山総持寺に特別僧堂が開設され、全国で五人を募集するというんです。そこで早速申し込みをしました。しかし、俗気の強い私には、朝の三時に起きて夜九時に床に入るまでのきまり切った生活の型にはめられるのは性に合わないのです。ここでいよいよ海外雄飛の決意をかためるのであります。

私のねらいは、宗派にとらわれた日本の枝葉の仏教ではなく、本当の仏教を学びとることでありませう。枝葉も大切だが、幹も尊い、根はさらに尊い。根と幹がなければ枝葉の生命はない。宗祖を通して釈尊に還るのだ。そうだが、まずインドに行こう。お釈迦様が二千五百年前に何を説かれたのか、それをこの体で、肌で感じ取ろう。南方仏教の坊さんたちは、二百二十七の戒

律をまもって生活をしている。金は使わない。かちやんは持たない。正午過ぎれば食事はとらない。一体どんなことしてるのだろう。そこでインドからタイ国に渡って向うの坊さんとしての修行を一年間つづけ、そしてこんどはアメリカに渡りました。いま白人の間の坐禅熱はすごいものがあります。ボヤボヤすると坐禅も逆輸入になりかねません。私はアメリカで二年、白人とともに坐禅にはげみました。そして日本に帰って来た。正に意気衝天の勢いでした。日本の奴に何がわかるか。何物にも捉われないこの俺の生き方を中外に示してやるという気概に燃えて新しい寺を作ったんです。働きました。夢中で働きました。勿論いまでも夢中で働いております。人が何を言おうが、人から何と言われようが、そんなことどうでもよい。ただ独りわが道を行く信念のもとに働いて働いて働き抜いて、やつと四十六歳になりました。

私はこのごろ、いつも自分に言いかけせることがあるんです。それは、人間万事塞翁が馬の故事です。



アメリカ横断旅行中(イエローストーンにて)

塞翁というのは、辺境の砦に住む翁のことで、塞翁が馬の話は淮南子という人の『人間訓』に出てくる話で、皆さんもご存知のことと思いますが、塞翁が、今でいうと一億円もするような素晴らしい競争馬を買った人です。近所の人たちが「そんな高価な馬を買っても仕様がないうやありませんか。そんな無駄金を使わないで、困ってる人に施してあげたら、あんだ『最高の人だ』といわれますよ」というのですが、塞翁は名馬を買いました。すると半年も経つと、その馬が逃げてしまいました。近所の人たちはそれを聞いて、「お気の毒ですねえ。やっぱりあの馬は買わなきゃよかったんですよ」というのですが、塞翁は平然としております。それから三ヶ月も経った頃、その駿馬が帰って来ました。ただ一頭だけで帰って来たのではなく、もう一頭の名馬を伴って帰って来たのです。近所の人たちは、前とは逆に「いやあ素晴らしい。あなたは先見の眼がある」と、ほめそやしましたが、塞翁は前と同様、喜ぶ色もなく平然としておりました。するとその後、

寒翁の一人息子がその名馬から落ちて足の骨を折って
身体障害者になってしまいました。近所の人たちは「と
んだ災害でしたねえ」と見舞いましたが、寒翁には別
に憂える風が見えませんでした。すると、国が隣国と
争うことになって、若者はみな軍隊にとられました。が、
寒翁の息子は身体障害者のため兵役を免かれました。
近所の人は寒翁に「あなたは幸せ者だ、親子三人が一
緒に食事できるほど人生に幸せはない。戦争に行つて、
人を殺したり、殺されたりするよりも、罪をつくらず
生きてゆけることほど素晴らしいことはない」といつた
というんです。

吉凶禍福はあざなえる縄のごとく、誰にも予測でき
ないのがこの世の中です。ですから、どんなこ
とに遭遇しても一喜一憂することなく、平常心をもつ
て生きることが大切であります。禅の言葉に「平常心
是れ道」というのがあります。平常心とは、読んで字
の通り、平生あるがままの心のことですが、さればと
いつて、物事に一喜一憂する心のことではありません。



飛行機に乗って雲の上に出ると、下界は雨でも上空はからりと晴れた青空であります。同じように、私どもの日常は、モヤモヤした分別妄想や、ドロドロした欲望の雲に掩われておりますが、そこを突き抜けると、まことにすがすがしいさわやかな心であります。そのすがすがしくさわやかな心がそのまま日常生活に活かされて、一挙手一投足が仏の道になう、それを「平常心是れ道」というのであります。

上といえば下、東といえば西、善といえば悪、利益といえば損失といった風に、私どもはすべてを相対的にみております。ここに取捨選択の心が起きて来て、そこに分別妄想が湧いて来ます。塞翁のように吉凶禍福を超越した心境になれば、下界がどんなに悪い天候でも上空は晴れた青空であるように、私たちはすがすがしい心でおられるのであります。

禅門で有名な『無門関』という本の「平常是道」という章に、こんな詩が載っております。

春、百花あり。秋、月あり。

夏、涼風あり。冬、雪あり。
もし閑事かじの心頭こころがらみに挂かかることなくんば。
すなわちこれ人間の好時節。

春は百花爛漫として咲き綻び、秋は月が美しい。夏は涼しい風が吹き、冬はすがすがしく雪が降る。つまらぬことにあれこれ思い煩うことがなかつたら、春夏秋冬、いつでも人間にとって好時節である——という意味であります。

春夏秋冬、それぞれ趣きがあつて、まことに結構な四季の移り変わりであります。それなのに、嘆き、悲しみ、瞋り、悩むのは、一体どういうわけでしょう。それは、余計な分別、いらざるはからいが心の中にモヤモヤしているからで、これさえなければ、春夏秋冬、いつでもすがすがしい好時節であるというのであります。

では、いらざる分別や妄想をなくするにはどうするか? それは、一切をみな仏さまにお任せすることです。道元禅師の『正法眼蔵』に、



釈迦殿落慶式

ただわが身をも心をも、はなちわすれて、仏のいへになげいれて、仏のかたよりおこなはれて、これにしたがいもてゆくとき、ちからをもいれず、ころをもつひさやずして、生死をはなれ仏となるとありますように、一切をみ仏にお任せすれば、おのずからそこに人間の好時節が訪れてくるのであります。

帰依三宝

聖徳太子は、かの有名な十七条憲法の第二条に、「篤く三宝を敬え。三宝とは仏法僧なり。即ち四生の終帰にして万国の極宗なり。何れの世何れの人か貴ばざらん。人甚だ悪しきは鮮し。よく教うれば即ち従う。夫れ三宝によらずんば、いかでか扞れるを直くせん」とあります。すなわち、仏法僧の三宝は、生きとし生けるものの最後のよりどころであるので何人もこれを貴ばなくてはならぬ。人は生まれつきの悪人は鮮い（な

いという意味もあります。よく教えればこれに従うものだ。それでも曲るのは三宝をよりどころとしないからである、というのであります。

「宗教なき教育は賢い鬼をつくる」といわれます。賢い鬼は社会をこわすことはできても、社会を建設することはできません。日本においては正しい宗教教育がおこなわれなくなつて年すでに久しいのです。ここに今日の日本の憂いがあるのです。

さいわい私は、仏法僧の三宝に導かれて今日あることを得ました。『修証義』第三章に、

仏は是れ大師なるが故に帰依す。法は良薬なるが故に帰依す。僧は勝友なるが故に帰依す

とあります。「大師」というのは、今日の言葉でいえば大先生ということであります。私どもにとつて一番大切なのは命であります。その命の使い方を教えてくださるのが大師、名医中の名医である仏さまであります。私どもは、肉体的には健康であつても、みな心の病いを持っております。煩惱妄想を持った病人なので

す。その心の病いをなおすには、大師である仏さまの診断により、仏さまの調合した薬を服用しなくてはなりません。その薬が即ち法であります。だから、「法は良薬なるが故に帰依」するのであります。さて、その法を今日まで伝えたのが高僧名僧であります。これらの方々なくしては仏教は今日まで伝わらなかつたのであります。だから、僧は勝友、すぐれた友であるわら帰依するのであります。

どうか皆さん、仏の教えによつて人間的に成長されることを祈念して私の話を終ります。

横浜市立工業高等学校にて収録



時代と心の不安にこたえる

●明日を開く心の法話シリーズⅡ

お経の般若心経

寿量品偈
観音経偈

のお経と解説

解説 佐藤俊明(前曹洞宗大本山総持寺副監院出版部長)山形県宝泉寺住職)

読誦

黒田大円(神奈川県善光寺住職)

新美昌道(東京都福厳寺住職)

小泉道弘(山梨県全福寺住職)

岡部康善(茨城県常光院住職)

蒔田恭治(山梨県保泉寺住職)

垣内善勝(東京都万福寺副住職)

桐元大智(神奈川県善光寺徒)

石井和泉(栃木県女性寺徒)

佐藤俊明(山形県宝泉寺住職)

●最新録音カセットテープ

神奈川県善光寺にて収録

●発売中

法話「こころ自由自在」心の悩み110番(テレフォン法話)——佐藤俊明



■K20H-52(定価)2,000円
発売元/キングレコード株式会社

《編集後記》

編集を担当して、方丈様の偉大な足蹟に圧倒されました。今回の榮譽は当然のことながら、心からお祝い申し上げます。お檀家の皆様も、この冊子をお読みになればキッと感動なさることと思います。善光寺様とお檀家の皆様が今後一層堅く結ばれ、共々に発展されますよう祈念します。末筆ながら伊藤三喜庵先生のさし画を転用させていただき、まことに有難うございました。(小熊)

成寿 特別号

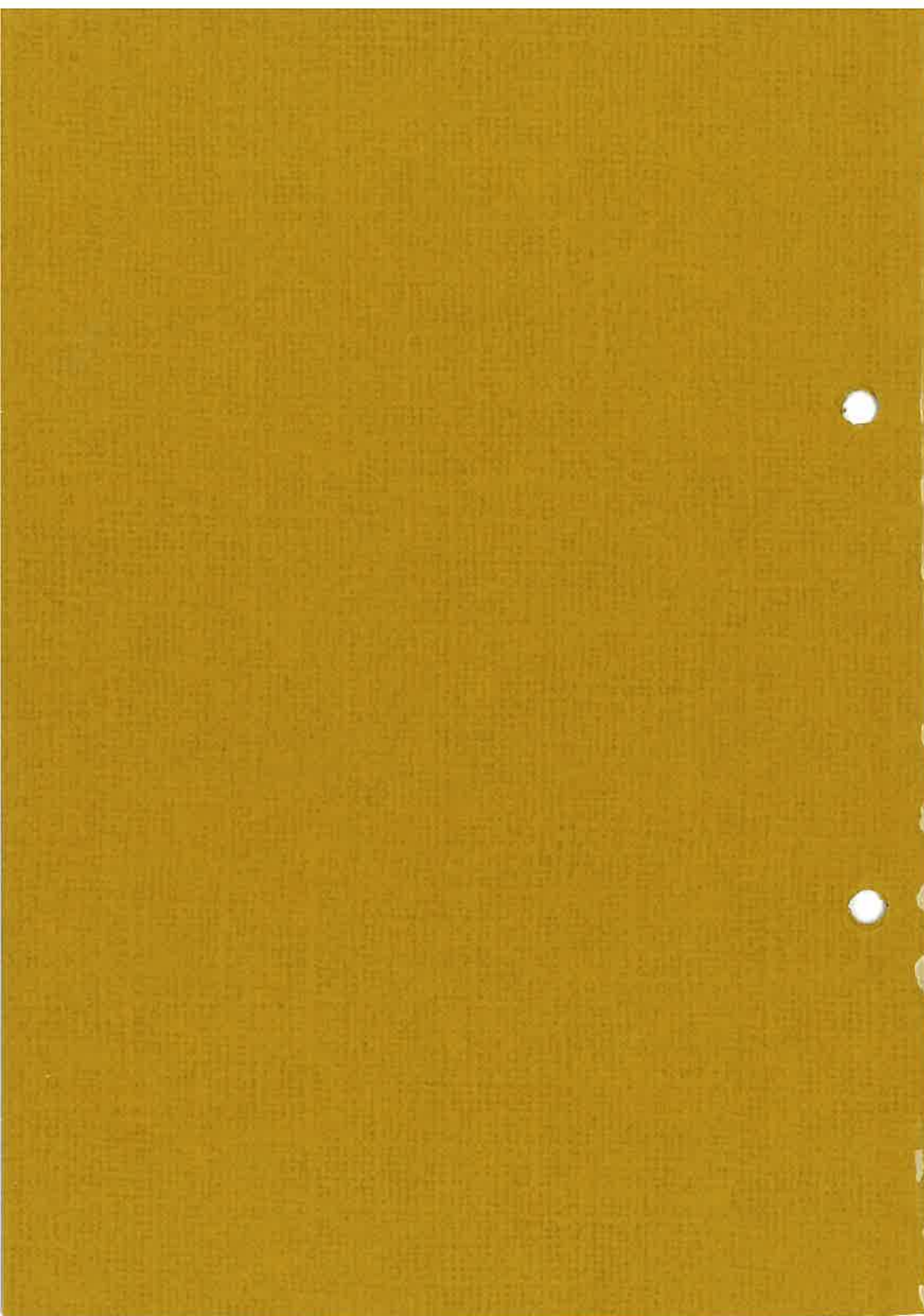
昭和五十九年十二月一日発行

発行所 成寿山善光寺

横浜市港南区日野町一六〇四

電話 〇四五(八四五)一三七一

印刷所 神奈川新聞社出版局



昭和五十九年十二月一日発行 成書特別号